# 思春期な四季の恋愛公式

かずゐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思春期な四季の恋愛公式

【Ｎコード】
Ｎ３４６３Ｚ

【作者名】
かずゐ

【あらすじ】
一月一日。主人公の少年は道に迷って困っていた少女を助けた。
そしてベタなラブコメが始まる――かと思いきや！？
新ジャンルヒロイン開拓中。ツン〇〇系ヒロインなんてもう古い！
……ごめんなさい調子乗りました荒らさないで下さい。

## プロローグ　（少年＋少女）×特別な出会い方＝恋の始まり（前書き）

オリジナル作品を書くのは初めてなので至らぬところも多いでしょうが、楽しんでいただければ幸いです。

## プロローグ　（少年＋少女）×特別な出会い方＝恋の始まり

ここ四乃葉（よつのは）市は、ある一点を中心に少し歪な四つ葉のクローバーの葉の様な形で接していた四つの町が合併して出来た小さな市である。

その一点から半径二キロ圏内は市役所などの施設が集中している事から本町と呼ばれていて、本町を中心として東西南北四方に接している四つの町はそれぞれ東乃葉町、西乃葉町、南乃葉町、北乃葉町と呼ばれている。

元は別の町だったからか、特に本町とその周辺は道が複雑に入り組んでおり、その複雑さは地図を持っていても道に迷う人がいる程だ。

だから、最近この四乃葉市に引っ越してきたばかりの少女が道に迷うのも当然の事だ。

土地勘も無く知り合いもいない町で、携帯の電池も切れている為に地図アプリなども使えず、更にはこの辺りでは珍しく雪まで降っている夜中、少女は途方に暮れていた。

しかし道行く人達は見るからに困っている少女を目にしても誰一人として声を掛けも手を差し伸べもしない。

これも当然と言えば当然の事か。見ず知らずの他人に構う人などそうはいない。

少女自身も立場が違えば自分も無視するだろうと自覚しているからか、怒りなどの感情は全く抱いていない。ただ少しだけ悲しいのか、暗い顔で静かに俯いてはいるが。

「ねぇ、どうかしたの？　大丈夫？」

「えっ！？」

どれだけの時間俯いていたのか、後頭部に少し雪が積もっていた少女が不意に掛けられた声に驚き顔を上げると、心配そうな顔をした一人の少年がいた。

少女は目を丸くして少年を見る。どれだけ見ても少女の知らない人だ。
「あ、僕の名前は――」
いきなり名乗られた事で少女は更に驚き目をより丸くする。
「――って言うんだ。ほらこれ学生証」
そう言ってポケットから何故か持ち歩いていた通っている高校の生徒手帳を取り出し、本当に少女に学生証を見せる少年。
一応住所など名前以外の個人情報を指で隠してはいるのだが、あまりに異常な少年の行動に少女は驚き過ぎて声を出せずにいる。
「あ、もしかして君、迷子なの？　この辺大人でも迷うし」
少年の勢いに流されたのか、大人でも迷うと聞いて少し気が楽になったのか、はたまたどこか親しみやすい少年の雰囲気に心を開いたのか、何が理由かはわからないが、少女は無意識の内に少年の問いに対し頷いていた。
「そっか。それじゃどうする？　交番に連れてった方が良い？　それとも僕が目的地まで直接案内した方が良い？」
今度の問いには無意識でも無言でも答えられない。
少女は少しの間考え、そして小声で、しかし確かに答えを口にした。
「……えっと、じゃあここまで送ってもらえますか……？」
おずおずと少女が差し出したのは、少女の引っ越し先の住所が書かれているメモ用紙。
「ん、了解。この住所は……あ、あの辺りか。んじゃさっそく行こっか」
「あっ」
メモ用紙に書かれている住所を確認すると、少年は微笑みながら自然な動きで少女の手を取り歩き出した。
突然の事に驚いたのか少女は小さく声を上げたが、それだけだった。
少年は大して力を入れていないのでその手は少女が振り解(ほど)こうと

思えば簡単に出来た筈なのだが、少女の家に着くまで二人の手が離れる事はなかった。

「あ、着いたよ」

「えっ？　もうですか？」

少女の家には一〇分と経たずに辿り着いた。初対面とは思えない程色々な事を話しながら歩いていたので、少女にとってはあっと言う間に感じられただろう。

この四乃葉市の道の入り組み方は地図を持つ大人でさえ道に迷う事で知られているが、道を把握していれば驚く程早くどこにでも辿り着ける事でも知られている。

そうとは知らず家からたった一〇分の場所で迷子になっていた事に気落ちしそうになる少女だったが、

「んじゃ僕はもう行くね」

「あっ！　ま、待って下さい！」

少年が繋いでいた手を放して去ろうとした為、慌ててその手を掴んで引き止めた。

「え、何？」

急に引き止められ少し驚いた少年が手を掴まれたまま振り返り、少女に尋ねる。

しばらく口を開閉するだけで何も言わなかったが、一度深呼吸をして意を決したのか、夜中にも関わらず大きな声で言った。

「あっ、あの！　送ってくれてありがとうございます！」

「別にお礼を言われる程の事じゃないって」

手を掴んだまま頭を下げた少女に、少年は苦笑とも微笑ともつかない表情で返す。

その微妙な表情は、態々（わざわざ）自分の事を引き止めてまで礼を言おうとした少女の行動に対してのものだ。

今この場には少年と少女の二人しかいないが、仮に第三者がこの様子を見ていたとしても彼と同じ様に考えただろう。少女は彼に礼

を言うだけの為に引き止めたのだと。
だがそれは間違いだ。
少女は下げた頭をギリギリ少年から顔が見えないくらいの中途半端な高さまで上げたところで固まっていて、いつまで経っても掴んだ手を放さないでいる。
「そっ、それで……あっ、あの……その、えっと……」
そんな少女の様子に流石に少年も疑問を抱き、とはいえ強引に手を振り解く訳にもいかないので話を聞こうと考えたところで、急に少女が真っ赤になった顔を上げて叫んだ。

「――――くん！　わっ、私と付き合って下さい！」

「……え？」
突然の事に驚き目を丸くした少年が少女の顔をどこかボンヤリとしつつも凝視するが、その表情に冗談などの要素は一切無く、本気である事が十二分に感じられた。
一月一日、つまり元日の午前〇時四六分の事だった。

## プロローグ　（少年＋少女）×特別な出会い方＝恋の始まり（後書き）

まさかの開始から二〇〇〇字そこそこで告白という超展開はいかがでしたでしょうか？
次話は明日の〇時掲載予定です。

## 第一話　春＋夏＋秋＋冬＝四季（前書き）

この作品は、王道ラブコメ展開をほぼ無視してお送りしております。

キャラの容姿の説明って、意外と難しいものですね。

# 第一話　春＋夏＋秋＋冬＝四季

一月一〇日火曜日。四乃葉市内に五校しかない公立高校は全校が今日始業式を行う。

その始業式の準備の所為で他の生徒達より早く学校に着かなければならない二人の少年が向かっている県立四乃葉高等学校、略称四高もその中の一校である。

「……眠い……」

二人の内五センチ程背の低い方、と言っても平均くらいの身長の少年が呟く。

よく見ると虹彩の色がヘーゼルと呼ばれる淡褐色をしているが、そんな目立たない部分以外は一切の特徴が無いという逆に珍しい外見の少年は、誰が見ても分かる程に眠そうな顔をしている。

「なら別に来なくても良かったんだぞ？　お前は生徒会役員じゃないんだから」

もう一人の少年は少し呆れたようにそう言った。

こちらは右目を隠そうとしているのか、右側の前髪だけを伸ばした左右非対称な髪型という漫画か何かでしか見た事のないような特徴的な外見をしていた。

「まぁそうなんだけど、でも手伝うって約束したし」

「相変わらず損な性格してんな、お前」

四乃葉高校では始業式などの準備は基本的に生徒会の仕事なのだが、役員は生徒会長が二年から一人、副会長と書記と会計が一、二年から一人ずつの計七人しかいない。

なのでヘーゼルの目の少年は親友であり一年の会計である右目隠しの少年を手伝おうと朝早くから起きた訳なのだが、果たして役に立つのやら。

「けど無理はすんなよ。お前朝弱いんだし、言いたかないけど無理してミスされたり倒れられたりしたらむしろ迷惑だ」

「ん、りょーふぁあぁい」
欠伸(あくび)混じりの返事に、右目隠しの少年の不安と心配は募(つの)る一方だ。
それでも手伝わなくて良いとは言わないのは、果たしてどのような感情の表れか。
「にしても……」
「ん？」
「いつもより酷くないか？　休みの間に何かあったのか？」
「や、あるにはあったけどこの眠気とは関係ないよ。年明けてから毎日遊んだりしてたのと長期休暇で生活のリズム崩した所為だから」
言い終えると同時に本日何度目かの大欠伸をするヘーゼルの目の少年。
「自業自得かよ」
呆れて小さく溜息を吐く右目隠しの少年。その際少し下がった視線を上げると、遠くに見知った人影が見えた。
「なぁ四季(しき)。あれ海山(うみやま)じゃねえか？」
「え？　どこどこ？」
四季と呼ばれたヘーゼルの目の少年がその人影を見付けるが、距離があるので寝惚け眼ではボンヤリとしか分からない。
遠目でも身長が一四〇センチにも満たない事が分かる程小柄なその人物は、二人に気付いたのか駆け寄ってきた。
「四季先輩に暦先輩(こよみ)じゃないですか！　おはようございます！」
そして二人の下に着くと、勢いよく頭を下げながら元気良く挨拶をする。
四季も暦と呼ばれた右目隠しの少年も、駆け寄ってきた後輩の姿と行動に微笑ましげな顔を浮かべながら挨拶を返す。
「おはよう夏芽(なつめ)ちゃん」
「よっ、海山。こんな朝早くからどうした？」
「今日は始業式ですけど、ちょっと朝練に参加しようと思いまして」
海山、或いは夏芽と呼ばれた少女は即答する。
だが暦はその答えでは納得いかないのか、更に質問を重ねる。

「朝練って陸上部のか？　でもお前もう引退してんだろ？」
少女、海山夏芽は一四〇センチに満たないその身長、大きな目をした可愛らしい童顔、更には肩口までのセミロングの髪を両耳の上の辺りで一掴みずつ束ねたツーサイドアップと呼ばれる髪型などの所為で実年齢より幼く見られるが、実は四季や暦の一つ下、つまり中学三年だ。こう見えて受験生だ。
「そうなんですけど、受験勉強ばっかりだと偶（たま）には走りたくなるんですよ。別に引退したからって朝練に参加しちゃいけないって訳じゃないですし」
どう見ても小学生にしか見えない外見だが、ランドセルは背負っていないし着ているのは四季や暦が卒業した中学の制服だ。
今年受験だと言われれば私立の中学を受験するのだと思われそうな外見だが、今年夏芽が受験するのは公立の高校だ。しかも四季や暦の通う四乃葉高校だ。
「あ、そうだ！　この前の土日は図書館でわたしの受験勉強に付き合ってくれてありがとうございます四季先輩！」
なので偶に四季が勉強を見ている。と言っても学力は去年の四季より夏芽の方が上だ。
「や、気にしなくていいよ。でもケアレスミスは気にしないと。今のままじゃ四高に入るのは厳しいんだから」
「うっ！」
だがケアレスミスが多過ぎる所為でテストの点数はあまり高くない。
四乃葉高校の偏差値は六四。現在市内に五校しかない公立高校の中では二番目に高く、一つのミスで合否が分かれる事もあるレベルだ。
「にゅ、入試までには何とかします！　それではわたしはこれで！」
そう言うと夏芽は元陸上部の面目躍如な速さで走り去った。
「行っちまった……。んじゃ、俺らも行くか」
「ん、了解」

しばらくして二人はようやく四乃葉高校に着いた。
「ふあああっ……ふぅ、やっと着いたよ……」
「お前がそこまで寝惚けてなけりゃチャリでもっと早く来れたんだけどな」
「う。そう言われるとなぁ……」
西乃葉町にある二人の家からだと、駅まで歩いて電車に乗り駅からまた歩くより家から自転車を漕いだ方が五分程早い。
そんな会話をしながら廊下を歩いて行き、目的地の体育館に向かう。
渡り廊下を渡ってすぐの所にある体育館のドアを開けると、上級生と思しき一人の生徒が二人に声を掛けた。
「おう来たか常陰（つねかげ）に節原（ふしはら）。遅かったな」
「いや、遅くないですよ会長。まだ俺ら入れて六人しかいませんし」
それにまだ暦が事前に言われていた集合時間より一〇分は早い。
「無駄だよ常陰。俺も一五分前に二番乗りで来たけど、会長は俺より三〇分は早く来てたらしくて、俺も同じ事言われたから」
集合時間の一〇分前の一五分前より三〇分前。つまり集合時間の一時間近く前から来ていた事になる。
「……いくら何でも早過ぎだろ……」
そう呟いたのは暦。
「お前達が遅過ぎなんだ。集合時間を守る程度で満足するな。男なら誰より早く来て自主的に作業をするくらいの積極性を持て」
「それ、会長に言われると説得力が違いますね。カオスな意味で」
態度や口調から思わず「兄貴」と呼びたくなるような生徒会長だが、女生徒だ。
一七〇センチ台後半はある高身長だし常に威風堂々としているし細めるとかなり迫力のある三白眼をしているが、間違い無く女生徒だ。
「何がカオスだ。私が男らしさについて語って何が悪い」

「いや、悪くはないです。ただ、この場で一番男らしいのが女性の会長なのが皮肉と言うか何と言うか……」
「女の私がこの場で一番男らしい？　何を馬鹿な事を」
豪快に笑って一蹴するその様子には当然ながら説得力など皆無だ。
そんな生徒会長に、まだ寝惚け気味ながらも辺りを見回していた四季が尋ねる。
「……これ、準備終わってませんか？」
「元々七人でもあまり時間をかけずに出来る作業だからな。三〇分の間に私一人で出来る事は終わらせ、私一人で運べなかった物も副島が来てすぐ取り掛かったから、五分前にはもう全て終わっていた」
その答えに絶句する四季と暦。当然だ。集合時間前に全て終わっているという事態など誰にも予想出来る筈がないのだから。
今四季と暦の頭に浮かんでいるのはただ一言。
（（……何の為に来たんだろ……？））
当然の疑問を抱く二人の事などお構い無しで話を続ける生徒会長。
「だがお前達のように遅れて来る奴もいるから、集合時間まで待っておく事にした」
だから遅れてない、という言葉は飲み込んでおく暦。いくら言っても聞き入れるとは思えないし、何を言ったところで始業式の準備をほとんど会長一人にやらせてしまった事実は変わらない。
「それに私は片付けには参加出来ないからな」
「えっ？　何かあるんですか？」
「珍しい事にこんな時期に転校生が二人も来るらしくてな。私が校内を案内する事になってるから、片付けはお前達に任せる」
「あぁ、それですか。でも分かりました。任せて下さい」
暦の態度に訝しむように目を細める生徒会長。
「反応が薄いな。こんな時期に転校生が、しかも二人も来るんだぞ？」
生徒会長の尤もな疑問に暦はサラッと答える。
「五日に四季と黒さんに会った時に黒さんから聞いてたんで」

「……北高生なのに何故四高（うち）の転校生の情報を知ってるんだクロ介は……？」
「まぁ黒さんですし」
「確かにそうだ。クロ介だからな」
「ちなみに両方一年の女子で、片方は美少女、もう片方はキャラは濃いけど見た目は普通らしいです」
「何故そこまで知ってる……？　実は両方クロ介の知り合いなんじゃないか？」
「黒さんなら有り得ますね」
暦はそんな風に雑談をしながら集合時間までの時間を潰した。
ちなみに四季は壁際に座って寝ていた。

集合時間三分前に生徒会役員全員が揃い、直後に解散した。
熟睡していた四季を暦が叩き起こし、二人は自分達の教室に向かう。
一一Ｄと書かれた小さなプレートの付いた教室に入ると、時間が時間だからか教室にはほとんど誰もいない。
四季が教室にいるクラスメイト達に軽く挨拶してすぐ自分の席で寝に入ったので、暦も全く眠くないけど寝る事にした。
かなり人目を引く髪型をしている暦だが、人付き合いが苦手だと言うより暦の髪型は人が引く事を期待しているのが目的の半分だったりする。残り半分はまたいずれ。

もうすぐＨＲ（ホームルーム）が始まるという時間になって、一人の女生徒が隣り合う四季と暦の席の間に現れた。
彼女が机に突っ伏して寝ている二人の肩に手を乗せて揺すると、暦が「んあ？」と奇妙な声を上げながら身体を起こす。だが四季はまた熟睡しているのか無反応だ。
強く揺すっても無反応な四季に女生徒は小さく溜息を吐くと、慣れた様子で拳を握り、四季の脳天に叩き込んだ。

「――――っ！？」
声にならない悲鳴を上げながら一瞬で目を覚ます四季。何事かと辺りを見回すと、未だ拳を握ったままの女生徒を見付けた。
ショートカットの髪は黒ではなくダークブラウン。良くも悪くも全くと言える程脂肪が無い身体。キツく鋭く切れ長な吊り目を向けながら溜息を吐いているその女生徒に対し、四季は殴られた頭を押さえながら恨めしそうな視線を向けて文句を言う。
「絶対もっとマシな起こし方あったよね、秋瑠（あきる）」
「寝てたアンタが悪いのよ。もうＨＲ始まるんだから二度寝するんじゃないわよ」
「……分かりましたよクラス委員長さん」
「何よ？　何か文句でもあるの？」
「や、何も」
今何を言っても通じない事を、四季は経験で知っている。
秋瑠と呼ばれた女生徒と四季は幼稚園の頃からの付き合いで、いわゆる幼馴染みだ。
両親達も四人とも学生時代の知り合いで、今年の三箇日も毎日家族ぐるみでお互いの家に行き来して過ごしたりと、漫画や小説のような幼馴染みをしている。
漫画や小説と違うのは、秋瑠の家は一軒家だが四季の家はそこから二〇メートル程離れた所にあるアパートの一室だという事か。
「そう。分かればいいのよ」
腰に手を当て胸を張った姿勢でそう言う秋瑠。そうする事で彼女の中で何かに区切りがついたのか、先程までの高圧的なクラス委員長といった雰囲気を消して雑談を始める。
「そうだ。アンタ達、転校生の話は知ってる？」
「ん、知ってる」
「この前の木曜に黒さんから聞いた」
「何であの人北高生なのに、しかも冬休み中なのにそんな情報知ってるのよ……？」

「「まぁ黒さんだし」」
その一言で納得出来てしまうのは、果たして誰がおかしいのか？
「えっと、この後始業式があるから早く席に着こうな。な？」
ＨＲが始まる時間になり担任が着席を促すが、休み明けで雑談が盛り上がっている生徒達の大半が無視して話を続けていた。新人なので舐められやすいのだ。
秋瑠がクラス委員長として注意しようと息を吸い、
「えっと、それにその前に転校生を紹介しないといけないからな。な？」
転校生という単語に反応したクラスメイト達が静かに、かつ速やかに席に着いたので、静かに息を吐いた。
「えっと、それじゃ入って来てくれな。な？」
ようやく全員が席に着いたので、ドアの前で待っているらしい転校生を呼ぶ担任。
教室のドアが静かに開かれ、廊下から一人の少女が現れる。
ライトブラウンの髪は肩甲骨の辺りまで伸びていて、肩から先の毛先には緩くウエーブがかかっている。
教壇に立つ姿からは緊張した様子は感じられず、むしろ今日から始まる新しい学校での生活に対する期待に満ちた目をしている。
「初めまして。春日子羽（かすがこはね）です」
はきはきと名乗りお辞儀をした転校生、子羽が顔を上げると――
（（（（（ちっ、ハズレか））））））
大半のクラスメイト、特に男子の顔に期待外れだと書いてあるのが見えた。
「ちょっ、その反応は失礼過ぎない！？　そりゃぼくだって職員室でもう一人の転校生の子と会った時『あ、負けた』って思ったけどさ！　ハズレとか思っても隠そうよ！」
子羽の容姿は中の上と中の中の境界線上と言ったところ。普通ではあるが決してハズレとは言われないレベルの容姿だ。

しかし運か間か、或いは他の何かが悪かったのか、一月という中途半端な時期の転校が美少女と被っていた所為でこんな悲惨な事になっている。
「……えっと、みんな仲良くしてくれるよな。な？」
「「「「「……」」」」」
「誰か何か言っよおおおおおっ！」
子羽の叫びに答える人は、誰一人いなかった。

転校生の紹介も担任からの連絡事項も終わり、秋瑠の号令でＨＲが終わる。
この後体育館で始業式があるので廊下に整列しないといけないのだが、クラスメイト達ほぼ全員が隣のＣ組教室にいる噂の美少女転校生を見に行っている。
「……酷いよ酷いよ酷過ぎるよ。ぼくだって転校生だよ？　転校生って普通この自己紹介直後のタイミングはクラスメイトから質問攻めされてるものでしょ？　なのにぼくの周り三人しかいないよ……？」
その為教室には沈んでいる子羽と、彼女に何と声を掛ければ良いのか分からず困惑している秋瑠と四季と暦の三人の計四人しかいない。
「ってか何で君らは見に行かないのさ？　ぼくに同情してるんなら出てってよ」
幸か不幸か子羽の方から話し掛けてきたので、素直に質問に答える三人。
「アタシはクラス委員長だから、今日が初対面だろうとクラスメイトのアナタの事を気に掛けるのは当然の事よ」
「俺はそもそも興味無いし、四季も秋瑠も行かないみたいだからな」
素直過ぎて何かを間違えている気しかしないが。
「転校生って二人だけでしょ？　ならもう一人とは冬休み中に会ってるから、態々Ｃ組の教室まで見に行く気にはならないかな？」

三人の答えを聞いた子羽の反応は、
「は？」
「なっ！？」
「詳しく聞かせて！！」
と言うより四季の答えを聞いた暦、秋瑠、子羽の三人の反応は大きく、特に子羽は先程まで沈んでいたとは思えない程の食い付きを見せる。
「長期休暇中に出会った少年と少女！　少女は少年の通う学校に転校！　何その王道ラブコメ展開は！？　ぼくそういうの超大好きなんだけど！！」
先程まで酷く沈んでいた人物と同一人物とは思えない程興奮している子羽。
そのあまりの興奮振りは、王道ラブコメ展開とは違い美少女転校生が隣のクラスに転入した事に全く気付いていない程だ。
ちなみに四季も秋瑠も暦もその事には気付いているが、今の子羽に話し掛けるのは先程沈んでいた時より難しいので黙っている。
「はっ！！　もしかして幼い頃に結婚の約束をして離れ離れになった二人が運命の再会を果たしたとかって展開！？　そこんとこどうよ節原君！？」
落ち着く様子が全く無い子羽を前に、話すしかないと悟った四季は小さく溜息を吐いてから素直に答える。
「や、そんなんじゃないって。初めて会ったのは僕が二年参りの帰りに偶然道に迷ってるのを見付けて道案内してあげた時だよ。だから別れ際に告白されて驚いたんだし」
「「「告白！？」」」
最後の一言が完全に余計で、子羽だけでなく秋瑠と暦も興味を示す。
特に秋瑠は子羽以上に興味を示しているかもしれない。
「流石に初対面だったし断ったよ？　確かに噂通り美少女だけど、外見だけで決めるのは失礼だと思うし」

「何だ。つまんないの」
「そうよね。アンタはそういう奴よね……良かった……」
つまらなそうにする子羽と、対照的に安堵の息を漏らす秋瑠。
秋瑠が最後に思わず漏らした言葉は、本人を含めその場の誰も気付かなかった。
と、C組教室に行っていたクラスメイトの男子の一人がD組教室に駆け込んできた。
何事かと四人が視線を向けると、その男子は四季に向けて叫んだ。
「おい四季！　お前が例の美少女転校生と付き合ってるって話は本当か！？」
「「「……はぁ？」」」
訳が分からず首を傾げる三人を横目に四季が問い返す。
「もしかしたら長くなるかもしれないから、始業式の後でも良い？」
「「「「良い訳あるか！！」」」」
秋瑠、暦、子羽に男子生徒を加えた四人が口を揃えてツッコむが、一応正論なので話は始業式の後になってしまった。

## 第一話　春＋夏＋秋＋冬＝四季（後書き）

果たして四季と噂の美少女転校生との関係は！？

三箇日連続投稿といきたかったのですが、無理そうです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3463z/

---

思春期な四季の恋愛公式

2012年1月2日00時49分発行